

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720126

研究課題名（和文） 20 世紀フランスにおける詩と造形芸術の創造的交流

研究課題名（英文） Creative Exchanges Between Poetry and Plastic Arts in 20th Century France

研究代表者

桑田 光平 (KUWADA KOHEI)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・講師

研究者番号：80570639

研究成果の概要（和文）：第二次世界大戦後のフランス現代詩と造形芸術の創造的な関係性の意義を明らかにするために、本研究では当初シュルレアリスムの活動に参加していた芸術家のアルベルト・ジャコメッティと詩人のイヴ・ボヌフォワがどのようにしてポストシュルレアリスム（シュルレアリスム以降）の道をそれぞれのやり方で築いていったのかについて、同時代のシュルレアリスム批判者であった哲学者サルトルの視点と最近の研究書を参照にしながら明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The aim of my research project was to analyse the nature and outcomes of the creative relationship between French poetry and plastic arts. Authors examined included the poets of *L'Ephémère* - a French poetry magazine published from 1967 to 1972 - whose works were strongly inspired by the art of Alberto Giacometti. My research focused more specifically on critical and poetic essays that Yves Bonnefoy wrote on Giacometti; these two artists were both involved in the early Surrealist movement. Referring to Jean-Paul Sartre's critical viewpoint about Surrealism, I attempted to clarify how both Bonnefoy and Giacometti struggled to pave their own way towards post-surrealistic forms of art - even if their respective works followed very different ways.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2010 年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 2011 年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2012 年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,500,000 | 750,000 | 3,250,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：ジャコメッティ、フランス現代詩、詩と造形芸術

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで 20 世紀フランス文学について、とりわけ文学批評家であるロラン・バルトの批判的思考と文学的実践との関

係について研究を進め、その成果を博士論文、紀要論文、学会発表、文芸誌への寄稿などの形で発表してきた。バルトは文学作品の批評はもちろんのこと、記号学的アプローチによ

って、建築、都市、ファッション、料理、写真、映画、絵画など多くの文化的事象を分析対象とした。だが、この20世紀を代表する批評家が「詩」について言及することはほとんど無かった。その事実は極めて興味深く、そこからバルト研究の傍ら、20世紀フランスの詩についての関心が生まれることとなった。象徴派からシュルレアリスムへかけての20世紀前半のフランス詩についての研究は海外においても日本においても極めて充実しており、とりわけシュルレアリスムの詩や芸術は最近再び注目を集め、研究書や翻訳の出版、展覧会の企画など活況を呈している。それに対して、バルトが活動した20世紀後半のフランス詩、すなわちシュルレアリスム以降のフランス詩に関しては個別の作家研究はいくつか存在しているものの、まとまった形で現代詩の置かれた状況を考察した研究は極めて少ない。

シュルレアリスム以降の現代詩にとって、もっとも重要な役割を果たした雑誌のひとつとして1967年に刊行された『レフェメール』(1972年に終刊)が挙げられるが、この雑誌はイヴ・ボヌフォワ、アンドレ・デュブーシェ、ジャック・デュパンなどフランス現代詩を代表する詩人たちが編集し寄稿しており、彼らの重要性は、世界的に見て現在最も重要な作家の一人であるポール・オースターが彼らに傾倒し、彼らの詩を英訳していることから端的に伺える。『レフェメール』の詩人たちの多くは、詩の可能性を造形芸術との対話に見出しており、ジャコメッティ、モランディ、ミロ、アレシンスキー、バロック芸術などについて多くの論考を物しつつ、その成果を自らの詩作の発想源にもしている。このような試みは、同時代の戦後アメリカにおいて、美術が積極的に文学をはじめとする他領域と積極的に手を切ることで、美術(とりわけ絵画)の自律性を確立したことと好対照をなす。

古代ローマのホラチウスは「詩は絵のごとく」と述べ、ルネサンスに至ってこの言葉は「絵は詩のごとく」と読み替えられた。以降、この二つのジャンルの混交は絶えず西洋文学・芸術の基盤にあったといえるだろう。しかし、18世紀ドイツの文学者レッシングは著書『ラオコオン』のなかで、絵画は空間の芸術であり、詩は時間の芸術であると定義することで、この二つのジャンルの美学的区分をはっきりと行った。このいわゆるラオコオン主義は、20世紀アメリカの美術批評家クレメント・グリーンバーグによる論考「より新しいラオコオンに向けて」にまで引き継がれることになり、現代絵画からの文学的要素の一扫がレッシングよりもさらにラディカルな形で展開されることになる。近代という時代が詩と造形芸術のそれぞれのジャンルの純化

に躍起になる中で、その流れに逆行するかのようになり、フランスでは『レフェメール』や『デリエール・ル・ミロワール』(1946年刊行)といった雑誌の中で、詩と造形芸術の積極的な対話が望まれることになる。そのことは、両雑誌において中心的な役割を担った芸術家のジャコメッティが「彫刻や絵画はつねにそれ自身以外のものによって成り立つ」と唱えていることから明らかである。第二次世界大戦後に芸術の中心がパリからニューヨークへと移り、絵画の純粋性を求めて抽象表現主義、ポップアート、ミニマルアート、コンセプチュアルアートなどさまざまな運動が形成されたのに対して、フランスは反動的とも思えるほどに、反ラオコオン主義へ、すなわち、詩と造形芸術の対話へと回帰していったのだ。この事態をどのように捉えるべきか。それが本研究課題の出発点にあるのは、このような問いである。

雑誌『レフェメール』の営みについては、アラン・マスカルの研究書(Alain Mascarou, *Les Cahiers de "L'Éphémère", 1967-1972*, L'Harmattan, 1998)が存在しているが、この著書は雑誌の成立から終刊までの歴史を実証的な方法で辿ったもので、個々の詩人がどのように造形芸術との関係を持ったのかということにあまり触れておらず、そのために、『レフェメール』という雑誌が担っていた詩と造形芸術の対話の場という使命についての考察にまで至っていない。また、文芸批評家のジャン=ピエール・リシャールは『現代詩11の研究』(Jean-Pierre Richard, *Onze études sur la poésie moderne*, Seuil, 1964)の中で『レフェメール』の詩人たちの作品をとりあげ分析を試みているが、そこでは造形芸術との対話という視点が決定的に欠けている。本研究の背景にあるのは、こうした先行研究の数の少なさや欠点であり、より広いコンテクストの中で『レフェメール』の詩人たちの試みを、とりわけジャコメッティとの関係から考えてみることで、20世紀後半のフランス文学史においてこれまでほとんど語られることのなかった、詩と造形芸術との創造的な対話の意義を明らかにすることが本研究の動機である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、20世紀フランス、とりわけ、第二次世界大戦後のフランスにおいて活発に行われた詩と造形芸術との創造的交流について、そのダイナミズムの一端を明らかにすることである。フランスとは反対に造形芸術から文学的要素を一扫する道へと進んだアメリカ現代美術との比較を視野に入れながら研究を進め、現代詩にいかなる可能性が残されているのか、あるいは詩は他領域との対話においてどのような活力を得てきた

のか、といった大きな問題について取り組むものである。具体的には、雑誌『レフェメール』に寄稿した詩人たちと造形作家アルベルト・ジャコメッティの関係性を中心に据えることで、先述の問題に対するひとつのあるべき解答を見いだすことを目的とする。

本研究では、対象となる作家をデュブーシェ、ボヌフォワ、デュパンの3人の詩人に絞り、まずは彼らが造形芸術とどのような創造的対話を行ったのかについて、彼らの詩作品と美術批評とを突き合わせ、対象となった芸術家たちの当時の一般的な評価なども調査しつつ、明らかにする。次いで、3人それぞれの詩と造形芸術との関係性を解明した後、それら個別のケースを包括的な視点から考察することで、彼らの活動が文学史のなかでどのような意味を持ちえたのかを検討する。具体的には、文学と芸術とを横断する形で活動を行ったシュルレアリスムと比較し、シュルレアリスム以降にどのような形で、詩と造形芸術とが新たな交流の可能性を持ちえたのか、そして、そうした他領域との交流なくしてもはや詩を書くことは不可能なのか、という問題に取り組むことになる。これら雑誌『レフェメール』に参加した詩人たちは、前衛的なシュルレアリスム運動に対して、それぞれ批判的なスタンスを持っており、シュルレアリスムの後にどのような詩の可能性があるのかということを実験に受け止めて、単に新たな前衛運動を起こすわけでも、また、単に過去に回帰してフランス詩の伝統を受け継ぐわけでもない形で、詩を書こうとしていた。そのことを念頭に置いて、現在すでに充実しているシュルレアリスム研究の成果を参照にしつつ、大きな歴史的視点からシュルレアリスムとの比較を行い、戦後詩の特異性を浮き彫りにすることを本研究の目的とする。また、造形芸術からの文学的要素の一掃を目指したとされるアメリカの状況と比較することで、なぜフランスにおいてそのような詩と造形芸術との対話が活発に行われたのかという考察も本研究の大きな課題のひとつといえる。

3. 研究の方法

まず関連書籍の収集とその読解を行う。発行部数の多くない雑誌『レフェメール

(*L'Ephémère*)』、『デリエール・ル・ミロワール (*Derrière le miroir*)』のジャコメッティ特集号、対象詩人たちの作品、詩人たちが文章を寄せた画廊や美術館の展覧会カタログ、シュルレアリスムをはじめとする現代詩に関する研究書、さらには、ジャコメッティ自身が残した文章や書簡、ジャコメッティのモデルとなった矢内原の手記、ジャコメッティに関する研究書。これらの収集と読解を行う。同時に、日本では入手できない資料に

関してはフランス国立図書館での閲覧を行う。こうした資料調査に加えて、フランス語圏における同分野の研究者——パリ第3大学のミシェル・コロ、ベルン大学のジョン・E・ジャクソン——との意見交換も行う。コロ氏は19世紀・20世紀のフランス近現代詩を専門とする研究者だが、デュブーシェやボヌフォワに関する研究書を刊行し、シンポジウムを開催しており、当該分野の代表的な研究者といえる。また、ジョン・E・ジャクソン氏は、自身も詩人であり、『レフェメール』の詩人たちと私的な交流もあるフランスの近代詩の研究者である。

こうしたフランス文芸史の観点からの研究に加えて、同時代のアメリカにおける、絵画のモダニズム運動、すなわち、美術と文学とを明確に分離し、それぞれのジャンルの純粋性・自律性を求める運動との関係を考察する。アメリカの批評家クレメント・グリーンバーグによるモダニズム絵画論とその影響を手がかりにしながら、そうした言説と比較対照することで、『レフェメール』に見られるようなフランスにおける詩と芸術との創造的交流が果たして詩や芸術の可能性を拡げることになったのか、また、成功か失敗かに関わらず、それは歴史的に見てどのような意味を持ちうるのかを検証する。

これまですでにデュブーシェとジャコメッティの関係については複数の論文で考察してきたので、本研究においては、もっともジャコメッティについて言及の多いボヌフォワを中心にとりあげ、ボヌフォワとジャコメッティの作品レベルでの交流を考察していく。

4. 研究成果

まず、シュルレアリスム関係の文献の読解、シュルレアリスムから脱することになったジャコメッティとボヌフォワのテキストの読解、さらには展覧会カタログや同時代の他の作家たちの証言などから、『レフェメール』という雑誌がどのように誕生したのかを明らかにし、その成果を美術雑誌『Art Trace Press』に『『レフェメール』の誕生とジャコメッティ』というタイトルで発表した。この論文ではシュルレアリスムの提唱者であるアンドレ・ブルトンが「現実」をどのように捉えていたのかを浮き彫りにし、ブルトンとは異なる「現実」を唱えようとして、シュルレアリスム運動から離れたボヌフォワが、同じくシュルレアリスムから離れて独自の芸術世界の構築へと向かったジャコメッティに共鳴していく過程を明るみにだした。

続いて、詩人イヴ・ボヌフォワと芸術家ジャコメッティとの関係を中心に、詩と造形芸術との対話のあり方についての研究をさらに進めた。ボヌフォワのジャコメッティに対

するアプローチは単にジャコメッティの作品だけに着目したのではなく、フランス近代文学史（とりわけ詩のジャンル）やヨーロッパの芸術史（ブッサン、モランディ、ピカソなど）、そして同時代の思想や批評の潮流（構造主義や記号論）を十分に考慮・検討した広いパースペクティブからのものである。この成果は「空虚を抱く手（今、空虚）——ボヌフォワとジャコメッティ」と題した論文で発表した。ボヌフォワは詩人であるだけでなく、美術史家としてもかなりの知識を有しており、ジャコメッティ以外の美術家や美術潮流（ブッサン、イタリアルネサンス、バロック建築など）についても多くを論じている。また、近現代詩に関する知識も一級の研究者のそれだといえる。そのような美術や近現代詩に関する深い知識が彼のジャコメッティを論じた詩的テキストにおいても明示的／暗示的にあらわれており、ヨーロッパ文芸史の中にジャコメッティを位置づけるという試みが、散文詩ないし詩的文章の形式で実践されているといえる。

論文の形で成果を発表できたのは、主にジャコメッティとボヌフォワの関係に関するものだけだが、デュパンやデュブーシェらの作品や、ジャコメッティに関する書簡などの新資料の読解も進められた。また、パリ第3大学のミシェル・コロウ氏やベルン大学のジャクソン氏との交流によって、当該研究の最新動向のみならず、当時の作家たちの状況や発言について知ることができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

① 桑田光平、「ジャコメッティの林檎」、『ユリイカ』、44巻4号、査読無し、青土社、2012年、233-241頁。

② 桑田光平、「空虚を抱く手（今、空虚）——ボヌフォワとジャコメッティ（1）」、『Art Trace Press』第2号、査読無し、2012年、216-231頁。

③ 桑田光平、「『レフェメール』の誕生とジャコメッティ」、『Art Trace Press』第1号、査読無し、2011年、136-145頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桑田 光平 (KUWADA KOHEI)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・講師

研究者番号：80570639